定年退職男性が食事サービスボランティアをとおして地域資源化するプロセスに関する研究

○ 桜美林大学　　野村　知子（07292）
友永　美帆（桜美林大学・07554）、杉澤　秀博（桜美林大学大学院・04671）

キーワード：定年退職男性、住民参加型食事サービス、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

１．研究目的

本研究は、次の３つの目的をもって行われた。

一つは、定年退職後の男性が地域の中に居場所を築くには、どのような要素が必要になるかという視点である。定年退職後の男性の居場所は、団塊の世代による大量の退職者が生じる中で、一つの社会問題にもなっている。2011 年度の高齢者白書においても、高齢男性の孤立感は高い一方で、地域活動参加意欲は高いことも明らかにされている。活動的な人とそうでない人に 2 極化している姿が推察される。男性の社会参加のプロセスを質的に分析することで、地域活動へ意欲的に参加するには、どのような要素が重要であるのか、そのメカニズムの一端を明らかにしたいと考えた。

二つめは、ソーシャルキャピタル（社会関係資本）の視点から、個々人がどのような経緯で地域資源化していくのか、そのプロセスを明らかにしていきたいと考えた。地域組織への帰属と個人のソーシャル・キャピタルの醸成については、どちらが原因で、どちらが結果かについては既往研究でも関心が払われている。本研究では、質的調査を用いてそのプロセスを検討する。

三つめは、住民参加型食事サービス活動が、参加する担い手にどのような意味や効果をもたらしているかを明らかにするという視点である。食事サービスが利用者へ与える効果や、事業形態と地域特性とのかかわりについての研究は蓄積されているが、担い手の参加メカニズムについては、十分明らかにされていない。

２．研究の視点および方法

住民参加型食事サービスを 20 年以上行ってきているＡ福祉公社において、配食サービスボランティアを行っている定年退職後の男性５名に、半構造化面接による聞き取り調査を行った。Ａ福祉公社では、365 日 1 日 2 食の食事を提供し、時給 800 円による有償ボランティアに自主組織を形成させ、そこに調理と配達を委ねている。配達方法は、車を用いて一人が 1 時間半で 15～18 個の弁当を担当し、基本的に手渡しで配達する。対象者の年齢は 65 歳～73 歳、家族構成は、夫婦世帯 4 名、単身世帯 1 名であり、活動歴は、1 年半から 8 年の間である。分析方法は、木下康仁による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチによる質的分析手法を用いた。

３．倫理的配慮

報告者が所属する大学の倫理委員会での承認を得た方法と調査票を用いて、調査を行った。

４．研究結果

「定年退職後自由な時間を楽しもう」としている人は多いに違いない。しかし、本研究では、定年退職後の自由な時間によって、体調を崩していく様子が語られていく。「半年ぐらい遊ぼうと思ったんですよ、初めぶらぶらね。そしたら、体じゅうぐあい悪くなっちゃって、ぶらぶらしていると。人間って、不思議ですね」「本当にもうだめだ、持たないなという感覚がありましたからね、正直言って。体がぼろぼろだったです。今でもそんなによくないですよ」。参加の動機は「人のためになることをしたい」「資格がなくてもできる」「病気を抱える妻の薦め」「ぶらぶら病からの脱出」と様々であるが、参加後の実感は、全員が「自分のためになる活動」といっている。「非常に自分自身が助けられているという、そういう状況ですね」「今はもう人のためにやっているという気は全くなくて、まさにやらせてもらっているという感じですね、今」。なぜ「自分のためになる活動」なのであろうか。そこには【緊張した時間、生活リズムの回復】【待っていてくれる相手・配達先の利用者】【仲間とのつながり、地域の居場所・組織】という３つのカテゴリーが存在した。これら３要素によって、「やりがい」がもて、自分自身がエンパワーされることで、健康状態も改善する。また、この組織は、「73 歳定年制」を敷いているので、参加者は、次の定年後の活動を模索している。ボランティア参加をとおして得た充実感と溢れ出るパワー、以前の健康悪化体験がもたらす恐怖心は、休むことなく次の社会参加へと向かわせる。

一方で、次の社会参加の対象も「地域の助け合い活動」へ向かいがちである。ここには、活動体験と個人的体験をとおした「新たな認識形成」の構築が存在する。「新たな認識形成」とは、活動をとおした高齢者とのかかわりや、本人・家族の闘病・介護・看護体験によって得た「高齢者理解の深化」と、配達体験や仲間とのつながりによる「コミュニティ感覚の向上、地域情報の獲得」があげられる。このような活動で得た認識の積み重ねが、次なる対象を「地域の助け合い活動」へと向かわせるベクトルを形成する。このようにして、配食サービスボランティアに参加した定年退職男性は、本人の体験と周囲からの働きかけによって、地域の助け合い活動に主体的・積極的に参加したり、活動を創造する「地域資源」へと変身していく。ここで「地域資源化した男性」の具体例を２つあげる。「この間も地震がありましたでしょう、女房と２人で全部回りましたもの、周りの家を。おばあちゃんとかしか住んでいないでしょう」「何とかサロンというのをやっていて、みんなが集まるような場所を提供したらというような活動があるみたいですけれど、私はそれをやりたいんですね。近所の人が集まってお茶飲みするようなね」

このように、「定年退職男性が食事サービスボランティアをとおして地域資源化するプロセス」をみていくと、糸車を回し続けるラットの姿が想起される。男性にとって地域の居場所を探し出していく事、その中で、やりがいを獲得し、仲間と出会っていくことは、生きがいの面でも健康維持にとっても、切実な課題であることが推察される。さらに、配達者を「待っていてくれる人」の存在は、やりがい感を向上させるために重要な要素であった。配達者は、定刻配達を心がけるだけでなく、利用者の心情をよみとり安心できるような態度や言葉がけをするなどの「喜んでもらえる工夫」をし、相手からの感謝の言葉や喜ぶ姿から配達者自身が「喜び」をえていた。このように、住民参加による食事サービス活動は、男性の地域の居場所づくりの貴重な場になることが明らかにされた。

本研究は、平成22 年度厚生労働科学研究費補助金の助成によるものである。